書評

岡村秀典編『雲岡石窟　遺物篇（京都大学人文科学研究所研究報告）』

八木春生

雲岡石窟は、中国山西省大同市の旧城、西一五キロの地点に開かれた全長約一キロにおよぶ仏教石窟寺院である。北魏時代（三八六～五三四年）の仏教美術を代表するのはもちろんのこと、これほど大規模な石窟群が国家事業として造営されたのは、中国史上初めてのことであった。おびただしい数の窟や像が彫り出されただけでなく、芸術性にすぐれ、また深い仏教理解に基づき配された浮き彫りの数々など、窟全体の完成度においてこれを凌駕するものはその後ほとんど現われなかった。この点で、雲岡石窟は世界遺産として顕彰されるにふさわしい。武州川に面する崖に開かれたこの石窟群は、かつては「武州山石窟寺」あるいは「霊厳寺」などと呼ばれたが、明代頃から雲岡石窟の名称が定着した。東から西に向かって順に、第一窟、第二窟と編号され、大型窟だけでも四五を数える。それ以外にも小窟、仏龕が多数穿たれており、造像の総数は五万一千体にもおよぶと言う。

北魏・和平元年（四六〇年）、宗教長官（沙門統）に就任した僧侶・曇曜が文成帝に上奏し、太祖（道武帝）以下、文成帝までの五人の皇帝（道武、明元、太武、景穆、文成）を供養するため、首都平城（大同）の西郊武州塞に五つの石窟を開くこととなった。これが現在「曇曜五窟」と呼ばれるもので、第一六～二〇窟がそれに相当するとされている。そしてそれらに続く第二期諸窟（第七・八、九・一〇、一一・一二・一三、一・二、五・六窟）と、洛陽遷都（四九四年）以後開かれた第三期諸窟（第二一～四五窟）の合計三つのグループから雲岡石窟は形成されている。雲岡石窟の造営は、五二〇年代初頭には完全に停止し、遼の時代（一〇四九年）と金の時代（一一四六年）にそれぞれ再建されたと考えられている。しかしその後は歴史の表舞台から姿を消してしまい、清代以降、まったく顧みられることがなくなった。

長い年月の間、人々からその存在を忘れ去られていた雲岡石窟を再発見したのは、『法隆寺建築論』を著し、日本における建築史学の基礎を築いたことで知られる伊東忠太氏（一八六七～一九五四）である。それは氏が一九〇二年～一九〇五年の三年におよぶ中国、インド、パレスティナ、トルコ、エジプト、ヨーロッパ、アメリカを巡る世界大旅行をまさに開始した明治三五年（一九〇二）六月のことであった。雲岡という一寒村に北魏時代の石窟が存在するとは夢想してもおらず、「遼や金の遺物を探るのが目的であったところが、案外な発見を致して実に雀躍して喜んだ」と伊東氏は記しているが（『支那旅行談』〈見学・紀行　伊東忠太著作集第五巻所収〉原書房、一九八二年）、「種々の関係」や「日程の都合」があり、わずか二日間だけの滞在であった。「大同から西の方朔平を経て歸化城に至り更に西方砂漠地に進入して見たな

らば、定めて石窟寺と西域との関係を示すところの古趾があるだろうと思うと、西遊の念が勃々として禁じ難いのであった」という言葉から、大規模石窟寺院の発見の喜びと、思うにまかせない日程の狭間で、石窟の前で天を仰ぐ彼の姿が彷彿とされる。その後フランス人の東洋学者であるエドワール・シャヴァンヌ氏が一九一五年に著した報告書《Mission archeologique dans la Chine septentrionale》(Paris) において、初めて雲岡石窟の写真が発表された。また中国では一九一九年に陳垣氏が「記大同武州山石窟寺」(『東方雑誌』第一六巻二、三号) を著わし、日本でも一九二六年に関野貞・常磐大定両氏が『支那仏教史蹟』(仏教史蹟研究会) 中に多くの写真を掲載し、それについて概説などをしたため、雲岡石窟は広く世の注目を集めることになり、ここに本格的な研究が開始した。

そして一九五一年から五年間かけて出版された、水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全一六巻三二冊こそが、雲岡石窟研究を飛躍的に進歩させたのであり、この研究が中国考古学および中国仏教美術史研究史上の金字塔であることは、誰もが認める事実である。出版後すでに半世紀が経過したにもかかわらず、その価値はいささかも減じていない。研究内容は質量ともに他を圧倒し、そのため新たに雲岡石窟研究を志そうとする者が出にくい状況が生まれたことも事実である。しかし近年、日中合同で『中国石窟　雲岡石窟』第一、二巻(平凡社、一九八九、一九九〇年) が出版され、また雲岡石窟文物研究所・山西省考古研究所・大同市博物館による「雲岡石窟第三窟遺址発掘簡報」(『文物』二〇〇四年第六期) や、劉俊喜・張志忠両氏の「北魏明堂辟雍遺址南門発掘簡報」(『山西省考古学会論文集』三、山西古籍出版社、二〇〇〇年) など雲岡石窟およびその周辺遺跡の発掘結果が公表された。関係資料が増加し新たな知見が得られたことで、雲岡石窟研究は再び盛んになり始めつつある。昨年、山西省大同市で開催された「二〇〇五　雲岡国際学術研討会」に、世界各国から多くの研究者が参加し、発表をおこなったことは記憶に新しい。

水野清一・長廣敏雄両氏ら東方文化研究所のメンバーは、一九三八年から一九四四年にわたり、雲岡石窟のみならず周囲にある重要な遺跡の調査をくまなくおこなった。本書は、その際収集された遺物の中で、あまりに小さな破片であって顧みられなかったものなど、これまで発表されることなく京都大学人文科学研究所に保管されていたものを整理し考察を加えた報告書である。編者である岡村秀典氏は序において、「『雲岡石窟』を補完するとともに、……日中両国の研究動向をふまえながら、考古学から雲岡石窟の新しい研究を発信しようという試み」であると述べるが、今この時期に本書が刊行されることは、間違いなく中国考古および仏教美術史の研究に新たな一石を投じることになると思われる。

本書では雲岡石窟(第一章) 以外にも、西梁廃寺(第二章)、西湾瓦窯址(第三章)、呉官屯遺址(第四章)、八蘇木地遺址(第五章)、平城遺址(第六章)、方山遺址(第七章)、西冊田遺址(第八章)、貴仁遺址(第九章)、徐疃甎室墓(第一〇章)、応県東張寨遺址(第一一章) などからもたらされた遺物が紹介され、それらの時代も新石器時代～遼金時代までと幅広い。雲岡石窟以前の大同の状況を知ることが、雲岡石窟理解に繋がると考えられると同時に、新石器時代の遺物をも収集していた水野清一・長廣

敏雄両氏らの知的好奇心の旺盛さや研究態度の柔軟性に、心底驚かされる。

中国南北朝時代の仏教美術研究者にとり、とくに重要と思われるのは、やはり雲岡石窟、西梁廃寺、平城遺址、方山遺址からもたらされた北魏時代の遺物の数々である。第一二章では、北魏以前の遺物に関する考察もなされているが、特筆すべきは、同章「二　北魏の平城と雲岡石窟」中、第八、第九窟前や東部台上寺院址、西部台上寺院址、西梁廃寺、また方山遺址から出土した「傳祚無窮」の文字瓦当に関して言及している部分である。これら「傳祚無窮」の瓦当は、西梁廃寺の一部の瓦当を除きすべて同笵、つまりひとつの木製笵で作られていた。傷や磨耗の程度から、それらは第三窟上部の東部台上寺院址と第八窟前から出土したもの（第一期）、第九窟および方山遺址のもの（第二期）、第三期諸窟（いわゆる西方諸窟）台地上の西部台上寺院址と雲岡石窟東約一キロに位置する西梁廃寺の一部（第三期）の三つの時期に分類されるという。皇帝の位が永遠に継承されることを祈念したものだとされる「傳祚無窮」の文字瓦当は、雲岡石窟でのみ用いることが許されたが、例外的に方山永固陵においても使用が認められたことが理解される。そして雲岡石窟では、第七・八窟から始まる第二期諸窟においてはじめて石窟前に木造建築が建てられ、第三窟の上に開かれた東部台上寺院址も、それと同じ時期に存在していたことが知られる。一方第二〇窟前からは、西部台上寺院址のものと同笵と考えられる複弁蓮華文瓦当が出土しているので、雲岡石窟で最初に開かれた曇曜五窟の前に建築物が建てられたのは、洛陽遷都前後であったと考えられるという。

「傳祚無窮」の文字瓦当に注目したことで、これまで看過されてきた感のある石窟前の建築や、東部および西部台上寺院、また雲岡石窟東一キロに開かれた西梁廃寺の存在がクローズアップされたことは重要である。雲岡石窟が、石窟群とその前の建築物、さらにいくつかの寺院から構成されていたことが知られ、従来の石窟およびそこに彫り出された造像を主とする研究では、片手落ちであることに気づかされる。雲岡石窟を正確に理解するには、修行空間としての石窟と、礼拝空間である木造建築部分とが合わさり、ひとつの「石窟寺院」が形成されていた事実を再認識することが必要である。また僧侶たちが訳経をおこない、生活を営む場所が少し離れて存在したことは、僧侶たちの生活形態のみならず、北魏が国家の威信をかけて造営した雲岡石窟と僧侶との関係を考える上で貴重な示唆を与えてくれると思われる。

さて、評者がもっとも興味を持ったのは、第九・一〇窟の造営年代に関する考察である。この双窟の造営年代については、造像様式や皇帝（孝文帝）が雲岡石窟に行幸した年代から四七五年頃であろうとする長廣敏雄氏説と、北京大学図書館で発見した「大金西京武州山重修大石窟寺碑」（金碑）の記載を根拠として、それが四八四～四八九年の開鑿だとする宿白氏の説がある。長廣説には、雲岡石窟へ行幸した年代と石窟完成が必ずしも一致するとは限らないという問題があり、宿白説にしても造営からおよそ七百年近く経って刻まれた碑の内容にどれほど信頼が置けるかという疑問が残るので、長らくこの石窟の造営年代に関して定説がない状態にある。中国では現在宿白氏説が支持されることが多いとはいえ、無条件にこの説を受け入れることは難しい。本書では第

九・一〇窟と同様、第二期に属する「傳祚無窮」瓦当が出土し、かつ四八一～四八四年に造営されたことが知られる文明太后の陵（方山永固陵）に着目することで、この問題に関して議論がなされている。そして第九・一〇窟前から出土した複弁蓮華文瓦当が、方山永固陵の蓮華化生文瓦当よりいくぶん新しいと考えられることを根拠として、第九・一〇窟は金碑に太和八年～一三年（四八四～四八九）に開鑿されたと記された「崇教寺」であるとする宿白氏説を採っている。

評者は以前、壁面に穿たれた仏龕の尖拱額を支える柱頭の形から、第九・一〇窟の年代について考察したことがある。方山永固陵の墓門に刻まれた同種の柱頭との比較によって、第九・一〇窟の造営年代は方山永固陵より早い（四八一年以前）との結論を得た（八木春生『雲岡石窟文様論』、法蔵館、二〇〇〇年）。それゆえ本書とは異なる立場を採ることになるが、本書の説の問題点には、以下の三点があると思われる。第一点としては、重要な根拠である第九・一〇窟前（南北トレンチ三）から発掘された複弁蓮華文瓦当の、出土した層位が不明であり、後の時代に別の場所から混入した可能性を完全には否定できないこと。またそれと、方山永固陵の蓮華化生文瓦当の比較が十分ではないことがあげられる。第二点は、石窟とその前に建てられた建築の間に、当然考慮されるべき時間差について、言及していないことである。方山永固陵より早く造営が開始していても、石窟を外壁まで仕上げてから工事に取りかかるのであるから、第九・一〇窟前の木造建築の完成時期が方山永固陵より遅れる可能性は否定できない。つまり石窟前建築物の瓦当を用いて、石窟の造営時期を決定するには問題があるのではないかと考えられるのである。また瓦当が一括して大量に焼成された後、保存される倉庫のような場所があり、そこから必要に応じて第九・一〇窟以降の第二期諸窟窟前の建築物や方山永固陵のために瓦当が配られた可能性についても考慮すべきであろう。第三点は、第九・一〇窟が四八四～四八九年に開かれたとするならば、四八四年に埋納された司馬金龍墓の遺物（屏風の礎石など）がその強い影響を受けることができた理由を説明できないことである。

しかし雲岡石窟以外では、方山永固陵においてのみ「傳祚無窮」の文字瓦当使用が認められた事実は、極めて重要である。これにより、方山永固陵が特別視され、文明太后が当時絶大な権力を持っていたことが理解される。またそれだけでなく、最高水準を誇ると思われるその造営に携わった工人たちが、雲岡石窟の工人たちと交流を持ったことは、この時期の墓葬美術と仏教美術とが、完全には分たれていなかった可能性を示している点で興味深い。方山永固陵の工人たちが、雲岡石窟と同じ集団に属していなかったのは、第九・一〇窟と方山永固陵に彫り出された飛天や鳳凰図像の細部形式の違いから明らかである。だがその一方で両者の図像の類似から、ふたつの工人集団が互いの作品について知識を持つだけでなく、密接な関係にあったことがうかがわれる。それゆえ墓葬美術特有の、漢民族伝統の死後の世界のイメージが、仏教美術に何らかの影響を与えたことを否定できない。最近、孝文帝が方山に造営した万年堂の門框彫刻についての報告がなされたが、そこに刻まれた武人像が、龍門石窟賓陽中洞の金剛力士像と多くの共通点を持っていたことも、このことと関係しよう。

本書の内容は多岐にわたり、残念ながらここですべてを論じることはできないが、北魏仏教美術を研究する上で示唆に富む記載が、上記以外にも数多く見いだされる。たとえば図版二四－二（標本番号五一）に示された、青石に刻まれる銀杏の葉のような形の樹木表現は、方山永固陵から出土したものだが、このような樹木の形式は、これまで洛陽遷都以降にしか見られないものであった（もっとも早い例は、景明三年（五〇二）銘を持つ甘粛省天水麦積山石窟第一一五号窟の壁画に仙人とともに描かれたものであったと思われる）。これが『水経注』に記載された永固堂の周囲に立っていたとされる「青石の屏風」の一部であるかもしれないとの指摘は興味深く、この樹木形式がおそらく南朝起原の文様であったと考えられることから、南朝美術の影響が四八〇年代初頭にすでに北朝で表れていたことが理解される。また西部台上寺院遺址から出土した緑釉平瓦が、「平城において屋根を荘厳に飾ることが洛陽遷都のころまで実際におこなわれ、西部台上寺院址が王宮と並ぶ重要な施設であったことを示唆している」という指摘や、雲岡石窟の東には「同時代の石窟は確認されていないかわりに、西梁廃寺のような木造寺院が建っていたのである。それは雲岡石窟の寺院景観を考えるうえで重要な発見であろう」という指摘は、雲岡石窟の景観という、新たな視点を提供している。

現在、人文科学研究所考古学研究室の本棚には、一九三八年から一九四四年の雲岡石窟調査ノートが並べられている。本書執筆のため、水野清一氏や長廣敏雄氏らによってなされたそれらの記録と、人文科学研究所に未発表のまま保管されていた遺物とを丁寧に突き合わせる作業がおこなわれたという。そして東方文化研究所以来の伝統が確実に継承されていると同時に、雲岡石窟研究が新たな段階に入ったことを知ることができるのである。本書は、未だ解決を見ない多くの問題に対して重要な示唆を与えている。また雲岡石窟を再発見したのが伊東忠太氏（建築史家）であったという事実に立ち返り、考古学、美術史以外にも建築史等の最新の方法論を用いていることで、研究がさらなる発展を遂げる契機となるに違いない。雲岡石窟文物研究所をはじめとする中国の多くの研究者の協力を受けこの報告書が刊行されたのは、日中両国の研究者たちが自由に行き来して情報交換できる現在の状況を示している。現地スタッフたちと対等な立場で協力しあうことは必要不可欠であり、それがうまくなされている点で、本書はこれからの中国研究におけるモデルケースとして位置づけられよう。

（B5判　本文一八四頁＋図版三〇頁　二〇〇六年二月　朋友書店　八四〇〇円）